全カリ NEWSLETTER No. 1

1995. 7. 24

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

新たなる全学共通カリキュラムの発足にむけて

総　長　　塚田　理

1991年以来全学的に取り組んできた新しい全学共通カリキュラムの全面的な発足にむけて、多くの教職員が連日のように献身的な努力を続けておられることに、私は心から敬意と感謝を表します。

ちょうど3年前に出された『21世紀をめざす立教大学の全学カリキュラムについて－全学カリキュラム検討委員会答申－』で「ものごとを多面的に見、主体的に考え、総合的に判断する能力を養うよう教育プログラムを展開する」必要性が指摘され、具体的な改革の方向として「各学部の教育理念と教育プログラムを根底に置きつつ、全学的な共通の理念と全学的な体制の下で展開する科目群」として全学共通カリキュラムを設置することが提案されました。そして、昨年10月の全学共通カリキュラム運営センター準備委員会の『全学共通カリキュラムの編成・実施に関する答申』においては、①意識や知性の国際化の促進、②言語情報の収集能力の強化、③異文化に対する対応能力の錬磨をめざす言語教育科目と、学生がたんに専門能力を伸ばすだけでなく、人間としての深い認識と価値観とを育てるとともに、広い教養にもとづいて総合的判断力を培う総合教育科目の理念が確認されました。

このような全学共通カリキュラムの実現は本学の特色ある教育の重要な基軸となるはずです。しかし、それを理念や方針として語ることと、現実の課題として実行に移すことの間にはしばしば大きな障壁があり、これを乗り越える努力と忍耐が必要であります。また、その実施のためには多くの制約のあることも否定できません。

かつてこの準備作業に多少なりともかかわったことのある者の一人として、私は全学共通カリキュラムに大きな期待を抱いております。とりわけカリキュラム改革を通してただ単に学生のみならず、各学部あるいは教員個々に刺激と衝撃を与えるような新しい教育内容が展開され、本学のさらに特色ある教育を実現する重要な柱となるよう望んでいます。そこに期待されるのは量的な豊かさというより質的な豊かさであります。

せっかくのこれまでの準備も、全教職員の協力がなければ、その実現は不可能であります。結局、全学共通カリキュラムの成否は私たち一人一人の肩にかかっていると言わなければなりません。全学で支え、成功させるべく力を合わせていただくことを心からお願いいたします。

運営の立場から

全学共通カリキュラム運営センター部長　　寺崎昌男

センター発足は昨年12月。岩場を登るような7か月が過ぎました。「全学共通カリキュラム運営センター」は、ようやく新カリキュラム準備の第一ステップにたどりついたところです。この間に開かれた運営委員会をはじめ、総合教育・言語教育の部会、研究室主任会や研究室単位等の大小の会合は、合わせて実に60回を越えます。運営委員会・研究室メンバーの献身とエネルギーは、新しい教養教育をつくりだす困難と希望とが産み出したものです。また、全学に足を置く活動を支えてくれたのは、残業に継ぐ残業を厭わなかった職員の努力でした。

1997年4月からの全面実施――これがセンターに課せられている至上命題です。「専門性に支えられた新しい教養人」を育てるためのカリキュラムが、「時間割」という究極の形をとって現れるまで、まだまだ急坂が続きます。絶えざる支援と激励をいただきたいのはもちろんのこと、隔意なき注文も大いに期待いたします。

全学共通カリキュラムの展開予定科目（1995年７月１日現在）

全学共通カリキュラムは、総合教育科目と言語教育科目から成っています。総合教育科目にはＡ（カテゴリー１～６）・Ｂ・情報科学・スポーツ実習があります。言語教育科目には、英語、初習外国語（クラスを設定するもの：ドイツ語・フランス語・中国語・スペイン語・ロシア語。設定しないもの：朝鮮語・ポルトガル語）と日本語があります。英語については計画を前倒しして、この４月より一部で実施が実験的に開始されています。以下、総合教育・言語教育の両部会に概要を説明していただきます。

総合教育科目について…総合部会より

総合教育科目は一般教育の理念を継承しつつ、従来の一般教育課程の分類にとらわれない新しい発想の下での専門性のある教養教育を目指しており、総合Ａ群、総合Ｂ群、情報科学、スポーツ実習により構成されています。（総合Ｂ以外の予定科目名を下に掲げました――６月26日現在。）

総合Ａ群は、従来の学問領域による分類ではなくテーマ別に構成されており、学際的、複合的な学習が可能であるように工夫されています。特に、演習科目を設けることにより、教員と学生との相互作用による新しい発見の場を提供できるであろうと考えています。

総合Ｂ群では更に複合的なテーマを設定すると共に、これまでの授業形式にとらわれない新しい形式の授業を展開することが検討されています。この総合Ｂ群は全学的な支援の下に本学の英知を集めた形でのカリキュラムの展開が期待されています。

また、社会の情報化に対応していくために情報科学分野の充実をはかり、スポーツ実習と共に総合教育科目における独立した柱となっています。

Ⅰ．総合Ａ

１．思想・文化

聖書の思想と人間観
キリスト教思想の展開
キリスト教と諸思想
キリスト教の知　演習Ⅰ～Ⅲ
思索の方法Ⅰ～Ⅵ
現代の思想状況Ⅰ～Ⅲ
哲学思想演習Ⅰ～Ⅳ
文化人類学の世界
文化人類学演習
レクリエーション論
レクリエーション論演習
スポーツ文化論

２．芸術・文学

文学と歴史
文学と社会
文学と人間
美術の歴史
キリスト教芸術
芸術と社会
美術論演習
音楽の歴史
キリスト教音楽
音楽と社会
音楽論演習
表象文化

３．歴史・社会

歴史学の多様性Ⅰ～Ⅳ
歴史学の批判性
歴史学の方法
個人と社会
現代社会Ⅰ、Ⅱ
文化と社会
地理学の世界
文化遺産の科学
市場と社会
世界経済と日本
政治と社会
世界政治と日本
現代社会と法
法とは何か
日本国憲法Ⅰ、Ⅱ
国際関係論

４．環境・人間

環境と科学Ⅰ～Ⅴ
生命と環境Ⅰ～Ⅴ
心の科学Ⅰ～Ⅴ
心の科学総論Ⅰ、Ⅱ
健康の科学

５．生命・物質・宇宙

生命の科学Ⅰ～Ⅳ
生命の科学実習演習
物質の科学Ⅰ～Ⅳ
物質の科学実習演習
人間と宇宙Ⅰ～Ⅳ
人間と宇宙実習演習

６．数理

数学の方法Ⅰ、Ⅱ
数学の方法実習演習
数理とシステムⅠ～Ⅲ
数理とシステム実習演習

Ⅱ．総合Ｂ

Ⅲ．情報科学

情報科学Ⅰ、Ⅱ
情報処理

Ⅳ．スポーツ実習

スポーツ実習Ⅰ～Ⅳ

言語教育科目について…言語部会より

立教大学「新言語教育カリキュラム」は、全学共通カリキュラムの中でも一番大きく変わる部分かもしれません。それによって立教大学の語学教育は新しいものをめざして生まれ変わり、学生と大学教育のニーズに応えようとするものになるはずです。新カリキュラムの特徴にはいろいろありますが、ここではその中から主なものをピックアップしてみましょう。

1）**コース制の実施**

新カリキュラムの一番の特徴はといえば、コース制の採用でしょう。これによって学生は基本的に自分のニーズにあったコースを一貫して（ある場合にはそれを組み合わせて）履修することになります。コース・メニューとして次の３つの種類があります。

a）コミュニカティヴ・コース（ＣｏＣ）：コミュニケーション能力の錬磨を中心に意図されたコースです。

b）リテラリーコース（ＬＴＣ）：リスニングやリーディングなどの受容能力のトレーニングに重きを置いたコースです。

c）言語文化コース（ＬＣＣ）：言語と切り離せない文化の学習を主眼にしたコースです。

2）**強化コース**

新カリキュラムの目玉の一つは、英語、ドイツ語、フランス語、中国語及びスペイン語に設けられる強化コースです。履修単位数が言語によって異なりますが（12〜20）、実力があり、且つやる気のある全学の学生を対象に本格的な語学教育を実施して、オールラウンドな実力をつけようというものです。

3）**初習外国語がほぼ希望したとおりに履修できる**

旧カリキュラムでは中国語やスペイン語を希望しても、必ずしも履修できるとは限りませんでしたが、新カリキュラムではその抜本的な改善を計ります。

4）**日本語の参加**

日本語も外国人留学生にとっては外国語の一つです。立教大学の国際化を目指して、新カリキュラムには日本語が加わることになりました。

5）**新しいカリキュラム編成と授業展開**

最後に、新カリキュラムは新しい言語学習理論あるいは教授法を取り入れながら展開される予定であることを云っておきましょう。具体的に例をあげれば、セメスター制の導入、少人数教育の重点的展開、週２回の授業、習熟度別クラス編成、新教材の開発、日本人にふさわしい教授法の採用、統一基準によるテストの実施などを目標としています。

おわかりでしょうか。新カリキュラムの目指すところは意識の革命なのです。

全学共通カリキュラムの構成

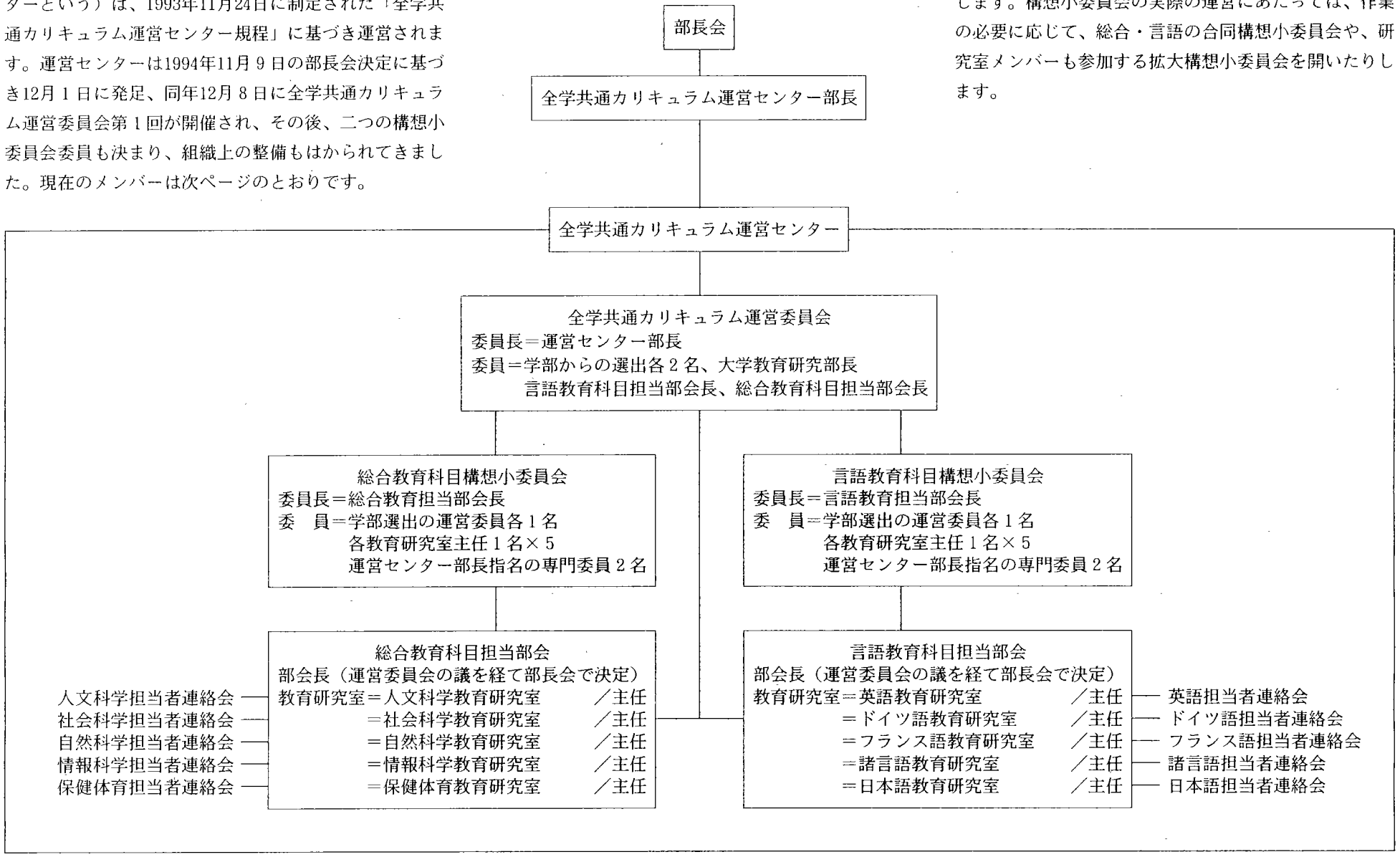
総合	言語
Ⅰ　総合Ａ　1　思想・文化	Ⅰ　英語
2　芸術・文学	
3　歴史・社会	Ⅱ　初習外国語
4　環境・人間	ドイツ語
5　生命・物質・宇宙	フランス語
6　数理	中国語
	スペイン語
Ⅱ　総合Ｂ	ロシア語
Ⅲ　情報科学	朝鮮語
	ポルトガル語
Ⅳ　スポーツ実習	日本語（外国人用）
	初習英語

全学共通カリキュラム運営センター組織図

（1995年７月１日現在）

全学共通カリキュラム運営センター（以下、運営センターという）は、1993年11月24日に制定された「全学共通カリキュラム運営センター規程」に基づき運営されます。運営センターは1994年11月９日の部長会決定に基づき12月１日に発足、同年12月８日に全学共通カリキュラム運営委員会第１回が開催され、その後、二つの構想小委員会委員も決まり、組織上の整備もはかられてきました。現在のメンバーは次ページのとおりです。

運営委員会は、運営センターの業務すべてについて審議します。構想小委員会の実際の運営にあたっては、作業の必要に応じて、総合・言語の合同構想小委員会や、研究室メンバーも参加する拡大構想小委員会を開いたりします。



＊＊全学共通カリキュラム運営委員会名簿＊＊

	氏　　名	所属	小委	
部　　長	寺崎　昌男（テラサキ　マサオ）	講教		＊
部　会　長	野田　嶺志（ノダ　レイシ）	文史	総合	
	実松　克義（サネマツ　カツヨシ）	大研	言語	
運営委員	青木　　康（アオキ　ヤスシ）	文史	総合	
	菊池　武弘（キクチ　タケヒロ）	文独	言語	
	小林　　純（コバヤシ　ジュン）	経済	言語	
	亀川　雅人（カメカワ　マサト）	経営	総合	
	本林　　透（モトバヤシ　トオル）	理物	総合	
	三木　瑛一（ミキ　エイイチ）	理化	言語	
	庄司　洋子（ショウジ　ヨウコ）	社社	総合	
	岡本　伸之（オカモト　ノブユキ）	社観	言語	
	栗原　　彬（クリハラ　アキラ）	法法	言語	
	所　　一彦（トコロ　カズヒコ）	法国	総合	
	朝比奈　誼（アサヒナ　ヨシミ）	大研		
オブザーバー（専門委員）	佐々木一也（ササキ　カズヤ）	文教	総合	
	田中　秀和（タナカ　ヒデカズ）	理総	総合	
	小松　英樹（コマツ　ヒデキ）	大研	言語	
	野谷　文昭（ノヤ　フミアキ）	大研	言語	
事　務　局	渡辺　信二（ワタナベ　シンジ）	教副		＊
	西田　邦昭（ニシダ　クニアキ）	教全		＊
	今田　晶子（イマダ　アキコ）	〃		
	田中　絵美（タナカ　エミ）	〃		
	中川　泰夫（ナカガワ　ヤスオ）	〃		
	遠藤　裕子（エンドウ　ユウコ）	〃		
	宇佐見　博（ウサミ　ヒロシ）	〃		

＊講教：学校・社会教育講座教職課程
教副：教務部副部長
教全：教務部全学共通カリキュラム事務室

総合教育科目構想小委員会委員

野田嶺志、青木康、亀川雅人、本林透、庄司洋子、所一彦、佐々木一也、田中秀和、金子啓一、間々田孝夫、斎藤宏、泉本利章、濁川孝志

言語教育科目構想小委員会委員

実松克義、菊池武弘、小林純、三木瑛一、岡本伸之、栗原彬、小松英樹、野谷文昭、原川恭一、斎藤松三郎、細川哲士、谷野典之、沖森卓也

教育研究室メンバー

	研究室名		氏　名	所属
総合教育	人文科学	主任	金子　啓一	文キ
			加藤　　睦	文日
			野田　嶺志	文史
			佐々木一也	文教
			西平　　直	講教
	社会科学	主任	間々田孝夫	社社
			栗田　和明	文史
			郭　　洋春	経済
			服部　孝章	社社
			小林　　公	社国
	自然科学	主任	斎藤　　宏	理化
			北村　　洋	文心
			加藤　秀生	理総
			田中　秀和	理総
			津田　義和	理総
	情報科学	主任	泉本　利章	理総
			石井　　巌	文心
			長島　　忍	経済
			山口　和範	社産
	保健体育	主任	濁川　孝志	大研
			沼澤　秀雄	大研
言語教育	英　　語	主任	原川　恭一	大研
			三井　雅弘	文英
			渡辺　信二	文英
			白石　典義	社産
			阿部　珠理	大研
			実松　克義	大研
			佐竹　晶子	大研
	ドイツ語	主任	斎藤松三郎	大研
			原　　克	文独
			前田　良三	文独
			高橋　輝暁	文独
			小松　英樹	大研
			宮内敬太郎	大研
	フランス語	主任	細川　哲士	大研
			原　　好男	文仏
			前田　英樹	文仏
			小倉　和子	大研
			宇野　邦一	大研
	諸言語	主任	谷野　典之	大研
			野谷　文昭	大研
	日本語	主任	沖森　卓也	文日

全カリ運営委員会の活動について

全カリの組織と構成員については、Ｐ４とＰ５に掲載しました。

ところで、それぞれの委員会は何をしているのか。今回は、運営委員会について紹介いたします。

運営委員会は、各学部の教授会に相当する機関で、昨年12月に発足して以来、３月までに10回、1995年度前期には７回開催されました。スタートしてしばらくは、諸規定や下部組織の整備が中心課題で、カリキュラムの検討は気になりつつも体制が整わない状態でした。

年度がかわって４月からは、従来一般教育部が担っていた一般教育課程の運営責任が全カリへ移行され、新入生へのガイダンスや定期試験実施等の実務も担うようになりました。そんな中で、セメスター制や、新カリキュラムの検討を続け、前期中に新カリキュラムを部長会審議の場に載せることにこぎつけたというのがこれまでの経過です。

以下、簡単ですが、各回の主な議案を抜粋してみました。

1994年度

第１回（94.12. 8）　総長の挨拶のあと、言語・総合両部会長を決定。
２回（　12.16）　学部委員の各構想小委員会への所属を決定。
学部指定単位の報告①（文学部・経済学部）
３回（　12.20）　両構想小委員会の専門委員を決定。
４回（95. 1.10）　学部指定単位の報告②（理学部）。
５回（　1.24）　第一次実施案担当の非常勤講師を決定。
６回（　1.31）　各研究室員を決定。学部指定単位の報告③（法学部）
７回（　2. 9）　各研究室の主任を決定。嘱託講師制度の検討。学部指定単位の報告④（文学部）
８回（　2.27）　専任人事の細則について検討。
９回（　3.10）　教務主任を決定。学部指定単位の報告⑤（社会学部）
10回（　3.23）　セメスター制の検討。

1995年度

第１回（95. 4.20）　新委員の紹介、研究室員・主任の異動、学部運営委員の担当の決定。セメスター制について、1995年度定期試験の実施について検討。
２回（　5.12）　セメスター制について継続審議。また、1995年度予算申請案を検討。広報紙発刊を決定。
３回（　5.26）　試験実施（特に監督）および試験規定について検討。
新カリキュラムの検討①（言語・総合）
４回（　6. 8）　予算案決定。非常勤人事検討委員会と教務事項検討委員会を設置。
新カリキュラムの検討②（言語）
５回（　6.23）　中間試験日程の決定。専任人事検討委員会を発足。シンポジウム開催を決定。新カリキュラムの検討③（総合）
６回（　7. 7）　1996年度カリキュラムのための非常勤コマ臨増の確認。
専任募集概要の確認。新カリキュラムの検討④（総合）
７回（　7.21）

次回は構想小委員会などについてご紹介する予定です。

シンポジウム「21世紀の大学教育を考える」のお知らせ

全カリで展開される教養科目群の在り方や、その従来の専門科目との関係、新たな教育方法の開発をめぐる諸問題など、大学改革の方向をさぐります。司会は本学法学部教授の栗原彬氏（政治社会学）。

基調講演：有馬朗人氏（元東京大学総長、中央教育審議会会長、原子核物理学）

シンポジウム：絹川正吉氏（ICU 教授、数学）、楠原彰氏（国学院大学教授、教育学）、他に学内講師２名

日　時：1995年10月26日（木）17：00～19：30

会　場：９号館大教室

対　象：教職員、学生、その他一般

＊皆様の積極的な参加を期待しています！

「セメスター制度」の検討

運営センターでは97年度全面実施にむけて、意義あるカリキュラムの展開方法や予想される様々な問題を検討しています。いま検討中の問題の一つに「セメスター制度導入」があります。これは、単に前期・後期制にするということではなく、カリキュラムの効果的展開と学生の学習の在り方総体の改善を計ろうとする一つの「考え方」です。今後、制度としてのメリット・デメリットの議論を続けてゆくわけですが、各教授会・部局でも全学的な問題として位置づけて検討していただきたいと思います。なお全カリ科目については、前期・後期制の導入がすでに決定されています。運営委員会・事務局では議論の材料として下記のような資料を作成しましたので、積極的にご活用下さい。

＊セメスター制度について＊

	メリット	問題点
教員・学生	1 集中的学習による履修効果の向上が望める（言語・総合　両方とも） 2 選択的学習による段階的、系統的な履修効果が望める ＊学生にとって、系統的な学習の道筋が明確になる ＊提供される科目が、カリキュラム構造において段階的、系統的に配置され、入学から卒業までの学習上の目標がより一層明確になる （学生の学習の動機づけには非常に重要なこと）	1 カリキュラムでの系統的段階制が強化されて、履修科目の先修要件が厳しくなるほど途中からの履修参加が厳しくなる 2 授業の進行速度が早いので、授業に追いつけない 3 授業間隔が短縮されたり、授業進度が早くなって、授業準備に負担を感じることがある 4 学会などで休講とした場合、従来より補講回数が多くなる
	3 夏期休暇、春期休暇の有効利用による教育の多様化が可能 ＊基礎再構築の機会、系統履修で特化している学生にとって多様性を得る機会にもなる ＊通常の学期では、開講しにくい科目を提供できる補完的学期機能 （実習、現地調査など） 4 入学時期、卒業時期の多様化が可能 ＊５年生以上で前期卒業の可能性がでる	5 コースのスケジュールをたてる際に次の学期のスケジュールのことも考慮しなければならない 6 セメスターにおける卒業論文の指導方法（後期入学を認めた場合、後期セメスターでの前期入学者と後期入学者の指導方法の差異） 7 組み合わせ科目の一方が不合格となった場合、時間割りの編成で選択幅が狭くなる（再履修コースの問題） 8 前期セメスターと後期セメスターでの開講コース数の調整 9 週２回授業を実施する場合、授業同士がぶつかって時間割りのやりくりが困難になる
	5 教員の教育、研究に対するエネルギー配分をより効果的に行うことが可能 ＊評価方法の多様化（小テスト，小レポートなど） ＊半期毎に教育に重点を置く期間と研究に重点を置く期間とに配分できる 6 教員の休講回数が減り、学生の登校率、出席率が向上し、学生の授業に対する集中度が高まる ＊図書館の利用が増える（特に試験期） 7 国際交流への対応が容易になる	10 前期セメスターの試験時期が就職活動の時期と重なる（４年生のみ）
事務		1 セメスター制を採用した場合、事務的な問題として１年に同じことを２回行わなければならない（春、秋における履修登録など） 2 種々の行事日程がある中での授業日数の確保 ＊前期セメスターと後期セメスターでの授業日数の調整 ＊期末試験；成績評価；追・再試験；種々の入試日程など 3 学籍の取扱い

主要参考文献：「大学時報」1995年１月号

中間試験実施に向けてのお願い

７月下旬の中間試験実施は、全カリ運営センターにとって未経験のことがらです。各学部にはすでに試験監督のお願いをしてありますが、スムーズな実施に向けてのご協力を心からお願いする次第です。予想外のトラブルもありえましょうし、対応もすみやかにはいかぬことも出てくるやもしれません。それだけに皆様の暖かなご理解・ご協力を願ってやみません。今回の監督依頼の在り方については、「全カリ運営の理念はわかるが、方法については疑問がある」との批判があることも承知しております。現在は試行錯誤の状態ですが、今後、全カリの理念の具体化を引き続き研究し、全学で支えられる体制を開発していきます。

［声］の欄

全カリは誰のものか？

私は旧一般教育部員として6年間にわたって一般教育科目を担当してきました。この度一般教育部は解散となり環境が変わりましたが、あらためて全カリ総合教育科目部会専門委員として、新しい観点からリベラル・アーツ教育を考えています。

旧一般教育部が解散しなければならなかった理由には、私の見るところ、学部教育からの独立と、組織の硬直化があったように思われます。全カリが成功するためには、是非ともこの2点を克服しなければならないと私は考えます。一般教育の独立は学部に所属する学生にも教員にも異物感を与えていたと思われます。これに小回りの利かない組織原則が加わって、その感覚を増幅していたようです。このことは一般教育部教員にとっても不幸なことでした。全カリの特徴は全学が責任を持ち、運営してゆくというところにあります。全カリ科目は全ての学部学科のものとなります。教員の立場からは、自分の学生に履修を指導し、自ら薦められるものでなければなりません。学生にとっても、自分の専門分野との有機的係わりから自由に選べ、また系統立てることができなければなりません。このことが実効をもって遂行されるためには、科目及び教員配置に関して、全カリ運営センターはおろか各学部においても、私たちは柔軟な姿勢を持ち続けなければならないだろうと思います。残念ながら現在までのところ、全カリについての理解が各学部教員に十分ゆき渡っているとは言えない状況です。学部教育を充実させてゆくためにも、何にもまして全ての教員と学生の皆さんに、全カリ科目が自分たちの学部のものだという認識をもっていただきたいと心から願っています。そうすることによってこそ、より多くの、多様な教員が積極的に全カリ科目に係わり、それらをより自分の学問と繋がりのあるものとして捉え、リベラル・アーツと専門の両方を相乗的に発展させることができるように思うからなのです。　（佐々木一也）

全カリ運営委員会のメンバーの一人になって

☆当然のことながらひどく、いや猛烈に、いや滅茶苦茶に忙しくなった。この組織の一員に組み込まれると、時とともに任務が無限に増え続けていって、その任務からは病気になって倒れないかぎり解放されないらしい、という最初の恐怖に満ちた予感は、いまではまぎれもない事実として、日々わたしの時間を侵し、わたしは「なんで俺ばかりがこんなに」という思いを懸命に理性で打ち消しながら、精神の衛生を、平衡を、いかに取るかで腐心する毎日を過ごしている。

☆その影響下で現れた兆候もしくは現象は、1）体重の減に比しての酒量の増、2）電車内での居眠りの増に比しての普通の睡眠持続の減、3）週末での完全痴呆化、4）授業することの喜びの増、5）名前を呼ばれるとぎくっと震える癖、等である。

☆それもこれも大学の組織再編と教育改革に伴う生みの苦しみといえば言えるのだが、それにしても問題は、その大事な仕事が最初から一部の人の過重な負担に依存し、それ以外の人の協力の道をどちらかといえば閉ざすかたちで、動き出してしまった強引な手法にある、という思いも捨てきれない。ことはたぶん立大はじまって以来の大改革である、そのくらいの強力な運営をしなければ何一つ変えられないではないか、というのも確かに事実であるのではあるが。

☆指摘しておきたいことの最大のことはやはりセンター部長、両部会長の超人的献身とそれを支える各委員の努力、わけても事務局の優秀さである。そしてそれにもかかわらず全学の先生方には必ずしも全カリの精神は浸透していないらしい現実の面妖さである。　（こ）

【編集後記】全学カリキュラム運営センターとはそもそもどんなものか、何をやっているのか、まずそれを教職員の皆様に少しでも理解してもらおう。「全カリ・ニューズレター」第1号はそんな思いで編集してみました。参考になったでしょうか。各教育研究室での議論も今後紹介したいと思います。97年度からの実施にむけて、これまではどちらかといえば制度、規則、展開コマ数、履修単位数といった枠の議論でした。ですがそれだけでも、本当に時間割が組めるのか、教室は足りるのか、再履修をどう扱うか、など大問題を抱えています。そしてその後に、いや同時に、授業内容の設計、シラバス作成、履修要項での文章化などの中身の問題があるのです。しかもそこに具体化されるべき理念の議論は、終ったものではなく、開かれたものであるべきでしょう。というわけで、この「全カリ・ニューズレター」を学内外の英知結集のための、対話のための媒体として育てていこう、という希望をもってはいるのですが、さて。

（広報担当：じ）